子龍のこと
【蜀小話】

吉野 圭

目次

趙雲（ちょううん）、子龍（しりゅう）について語ろうと思う。

世間で趙雲は美麗で勇壮な武将として語られているようだ。武将らしく無骨な印象を持たれ、正直だが猪突猛進、さっぱりとした陽性の性格と思われることも多い。

しかし私のなかで子龍の印象は生涯、清楚（せいそ）で洗練された男であり、几帳面で真面目、物腰穏やかな武将であった。

語る声は静かで声を荒げたことはない。酒に酔って騒ぐ声を聞いた者もいない。

頭に血を昇らせることは決してなく、常に冷静に物事へ対処していた。

そして彼は常識人だった。常識を守ること厳格なほどだ。

生来が非常識で、奇異奇抜な行動ばかり取っていた（本人にはその自覚はなかったのだが）丞相（じょうしょう）の世話を焼き、さぞ苦労したことだろう。

かつて子龍が私を諌（いさ）めたことがある。その話は他国にも知れ渡り、記録されることになった。

世間では地位として上にある丞相を堂々と諌める態度が意外に思われたのかもしれないが、これは常（つね）のことであり、彼の真面目さが発揮された行動としてほんの一部の話が外に洩れたに過ぎない。

――建興五年、箕谷の戦闘で趙雲は敗北したが、退却の際に物資を棄てずに持ち帰った。退却の成功を労うため諸葛亮が物資を恩賞として趙雲軍に配ろうとした。ところが趙雲は、

「敗戦で恩賞を受け取るのは道理が通らない。その物資は冬の備えとするべきだ」

と諸葛亮を諌めて受け取ろうとしなかった。『趙雲別伝』

まさに『別伝』の記録そのままの、子龍らしい場面として思い出される光景がある。

あれはいつのことだったろう。子龍が執務室の入り口から真っ直ぐに歩いて来て、戦闘作戦の書かれた紙を私に差し出して見せ、「今回の作戦で分からないことがあるんだが、質問、いいか」と訊ねた。

その紙切れは子龍自身が用意したものだった。いつもそうなのだが彼は作戦を耳で聞くだけではなく自分自身で書き留めておく。作戦は大筋さえ分かっていればそれで良い、後は現場の我々に任せろという主義の武将が多い劉備陣営では一際目立つ、めずらしい行動であった。

私は彼の持っている紙を覗いて見る。すると、びっしり細かい文字で作戦が書かれているので慄（おのの）いてしまう。

“本筋のみ押さえよ”という助言は彼の耳に決して留まらず、戦場における一挙手一投足、それこそ隊の行進の足が右と左のどちらから先に出たら良いのか、ということまで始めから頭に入っていなければ気が済まないのだった。

軍師府には多くの軍師職の職員が勤務していた。その府の最奥にある私の部屋へ向かう趙将軍の規則正しい足音が聞こえるたび、職員たちの噛み殺した笑い声があちこちから聞こえた。

「ほら、几帳面の趙将軍が来た。軍師将軍（長官）は今日は何刻、質問攻めに遭うのか」
“お気の毒さまです”。
　私は職員の同情の視線を浴びながら子龍の応対をすることになった。しかしながらそれは決して、嫌な時間ではなかった。

　その日の応対は特に長い時を要した。
　敵を追い返す重要な戦闘前であった。滅多に軍師府に姿を見せない “武闘派” の将軍たちさえ、作戦についての質問と言うより私からの勝利祈願を求めて姿を見せたほどだ。敵に力を見せつけようと全軍が高揚している時だった。
　その武闘派たちが帰ったすぐ後、彼等の汗の臭いを掻き分けるようにして趙将軍が執務室へ入って来た。
　あくまでも清潔な身なりで清浄な薫りを漂わせた彼は、汗の臭いに眉をひそめることもなく私のもとへ歩いて来た。
　そしていつものように前置きもなく本題を言ったのだ、
「質問、いいか」
　と。
　びっしり細かい文字の書き込まれた紙を覗きながら、私は慄きを隠して答えた。
「ええ。どうぞ。何なりと」
　それから何時間だったか、彼の質問に答え続けた。
　どれほど細かいことで、またどれほどしつこい念押しであろうとも、子龍の疑問にはあくまでも丁寧に答えようと決めていた。
「よくまあ、嫌な顔もせず」
　と職員には感心されたが、子龍の質問には無駄が何一つなかったから当然に出来たことだ。
　並みの武将のように臆病から細部にこだわっていたわけではない。ただ本性から真面目であるから、疑問に思うことは確認しておかなければならないと本気で思っていただけだろう。そして驚くべきは子龍の場合、これだけ細かく戦闘作戦を詰めたとしても、決してそれに縛られることはなく現場では応用のきいた戦いを見せる。基本を徹底的に頭に叩き込んで出陣したからこそ、現場で輝かしい結果を出すことが出来たのだろうと思う。
　優秀な人だった。そんな優秀な武将の手伝いが出来るならばどれほど時間を割いても惜しくはなかった。
　それに質問攻めにしたということは彼が私を信頼してくれた証だと分かっていたから、長い応対の時間は幸福なひと時でもあった。

　始め私は子龍に嫌われていたのだと思う。
　もっとも誰であれ、あの当時は私のことを嫌っていた。
　嫌悪を露骨（ろこつ）に表す他の武将たちとは違い、上品な子龍は決して顔に出すことはなかっ

た。誰にも相手にされず会話さえ交わしてもらえなかった私へ、彼だけは気を遣い話し掛けてくれるということまでした。

しかし子龍の言葉の端々には隠し切れない嫌悪が滲んでいた。

他の武将たちが “異質な者” への不審感や功績もないのに取り立てられている怒りなどの理由から私を嫌っていたのに対し、子龍はもっと本質的な部分、人としての相容(あいい)れなさから拒絶していたように感じられる。

劉備陣営の中では異質な者、比較的に良い家柄出身であり、さらに後から陣営に加わったという経歴で子龍は最も私に近い立場の者であった。

彼と私は「似たところがあった」とさえ言って良い。

子龍自身、私と同じく最初は陣営内で除(の)け者にされた経験から私を気遣ってくれていたのは事実だった。

それでも拭いきれない本能的な嫌悪のようなもの、無意識から来る拒絶感を彼は私へ抱いているようだった。

私は子龍に相対する時、彼との間にいつも一定の距離があることを感じていた。心の壁のようなもので、ある距離から先には進めないのだ。

その壁は私が他の武将たちからの信頼を勝ち得た後も、長く消えなかった。

子龍が私を嫌う理由について考えてみたことはある。

本人に訊ねたことはなかったし、訊ねたとしても答えてはくれなかったろうが、私への嫌悪は彼自身の内心の複雑な葛藤から来ていたのではなかったかと想像している。

最も遅く入り、最も年若い私が最終的に主君の “腹心” と呼ばれた。

おそらくそれまでは子龍がその座に近かったはずだ。主君自身の強力な引き抜きで陣営に入った子龍。とりわけ主君の気に入りで、寝食を共にして語り合う間柄だった。私が来るまでは。

（因(ちな)みに我らが頭首は若い頃から仲間と戦場で寝起きした時代の癖で、家臣と寝食を共にするのが信頼の証と信じている。また、君臣の垣根を越えて遠慮なく語り合うのが好きであるから、そのためにも寝食共にすることが実際上必要だったのである。かなり地位が高くなってからでも、最も下位の兵卒たちのもとへ飛び込みで入って寝食を共にして驚かせることがあった。そういう人なのだ。他意はない）

「嫉妬」、と言えばあまりに卑俗に落ち過ぎる。

むろん子龍はそのようなくだらない感情を抱く人ではない。

だが他人への敵意としての「嫉妬」を抱けない人だからこそ、自分の内へ向かう葛藤があったのではないかと想像するのだ。

まさか子龍は出世を狙っていたわけではないし、主君の引き立てを欲しがっていたわけでもない。それでも彼の存在意義、居場所のようなものを私が一部奪ってしまったことは事実だった。

冷静な表情の下にちらと垣間(かいま)見えた子龍の苦しみの熱を今でも思い出す。

あの頃の子龍の私への嫌悪と壁は、そんな彼自身の苦しみの表れかもしれないと考え

ている。

しかしその壁も、月日が経つうちに消えた。
他の武将たちのように赤壁赤壁(せきへき)戦後、劇的に変わったのではない。
戦闘作戦について長時間でも対応したり、彼の質問には全て丁寧に答えたりしているうちに、氷の壁が少しずつ、少しずつ、緩やかに溶けて流れたのだった。
長くともに働き命を預け合うなかで、言葉を交わすだけでは決して築けない絆を得られたのだと信じている。

……時は流れて、主君との別れの日が来た。
あの山城で主人を看取ったのは一人、子龍であった。
彼はこの時に葛藤から完全に解放され、報われたのではないだろうか。

偉大なる先帝(せんてい)が世を去って、時代は変わった。
関将軍も、張将軍も、ここに名を挙げられない無名の闘士たちも、前世代の人々はもう誰一人残っていなかった。
若い皇帝を支えるため私は独りで全ての責任と義務を負うことになり、国内外の混乱の一切がこの背に押し寄せた。
振り返って見れば人間として処理出来る範囲の仕事量ではなかった、それでも単身で立ち向かおうとした私が悪かったのだろう。
あちこちでほころびが生じ、組織の規律は乱れ始めた。
皇帝に取り入る者たちが表れ、私の失脚を望む者たちが声高に誹謗中傷を叫び、反対する者と賛成する者とで国は二分された……。
愚痴は言うまいと思う。
私に能力がなかったのだ。
私は疲れ果て、自分の責任を感じ引退すら考えていた。

地の底を這うようなその時期だ。
ふと後ろを振り返ると子龍が居たのだった。

前世代の生き残りとしてただ一人、私を支えてくれたのは趙将軍だった。
彼は疲れ果てている私の背をいつも静かに見つめていてくれた。
そして吊るし上げられ論争に打撃を受けている私に近寄り、目に涙を浮かべて言ったのだった。
「どうか、忘れないで欲しい。私はどこまでも君の味方だ。私だけではない、心ある者は皆、君の気持ちを理解しているんだ。君の味方は大勢いる。君は、決して一人ではないんだよ」

建興六年冬、周囲の大反対を押し切って出兵した私が戻った時、趙将軍は手放しで喜んだ。
彼は私の顔を見るなり駆けてきて、兵士達が見ているのもかまわず大声で言った。
「良かった。帰ってきてくれて、本当に良かった！」
この時の子龍の顔はよく覚えている。
美しく老いた人だった。
もとから白かった肌がいっそう透けて見えるほど白く、その顔を縁取っている白髪も陽に透けて輝いていた。
目尻を下げ、柔らかい笑顔を向ける彼の顔には深いしわが刻まれていたが、瞳は若い頃と変わらない色をしていた。いやむしろ若い頃の暗い光が消え、彼の本心からの優しさで満ちた瞳だった。
そんな瞳を向けて彼は恥ずかしげもなく私の手を握り、言ったのだった。
「もう大丈夫だ。君は、強い人だ……」
その時に私は初めて知った。
彼が私を支えることを自分の使命としていたことに。
たった一人、国に残って“義理の弟”である私を傍で見届けることを彼は最後の仕事としてくれていたのだった。

趙雲、字は子龍。
稀代（きだい）の武将はそれから間もなくこの世を去った。
肩の荷を降ろしたかのような安らかな眠り顔だった。

繰り返す。
世間で趙雲は勇壮な将軍と思われているかもしれない。
しかし私の知る「趙雲子龍」は、優しさを本領とする繊細な男だった。
そして私の記憶に残る姿は、若く勇敢な白馬の騎士ではなく、老いて白髪となった彼の幸福そうな笑顔だ。

心の兄よ。
私は永遠にあなたの老いた美しい笑顔を忘れないだろう。
――この人生で本当に“友”となってくれたことを感謝する。

＜了＞

子龍のこと【蜀小話】

著　　吉野圭

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社